

## 「みんな違う」が当たり前

### ～多文化と個性を尊重するオーストラリアの保育園～

- 訪問日 2016年10月25日(火)
- 説明者 Sanazさん、Ashleeさん
- 視察先 Only About Children (OAC、オーク保育園)
- 担当 藤澤・寺内・小沼・松山

#### 1 視察の趣旨

「働く女性にとって子育てしやすい社会を構築するには」というテーマをもってオーストラリアの保育園を訪問し、現地の保育の実情に触れ、オーストラリアの優位点と日本に取り入れられるシステムを紹介したい。同時に日本の保育の優位点についても考察したい。

#### 2 オーストラリアの保育事情

オーストラリアには日本と同じように様々な保育サービスがある。主なものとして、デイケア（0歳～/8時～18時/日本の保育園に相当）、ロングデイケア（長時間預かるデイケア）、プリスクール（3歳～5歳/9時～15時/日本の幼稚園に相当）、ファミリーデイケア（一般家庭において資格を持つ保育士が4人まで預かることができる）などがある。Kindergarten（キンディーと呼ばれる教育施設）は全ての小学校に併設されており、子どもたちは通常ここで一年間を過ごした後そのまま小学校へ上がる。

保育料は日本に比べかなり高額であり、ロングデイケアの場合一日当たり最低でも70豪ドル、シドニーなど都市部では100豪ドル以上、最高190豪ドルにも上る。保育サービスの事業者に対する補助制度はなく、利用者に対して所得に応じた補助制度がある。

利用希望者に対する保育施設の数是十分とは言えず、オーストラリアは現在、日本と同様に待機児童問題を抱えている。

#### 3 オーク保育園

シドニー中心部から車で20分ほどの閑静な住宅地にあるOnly About Children Neutral Bay Campus（オーク・ニュートラルベイ園、以下オーク保育園）を視察した。徹底した管理システムと独自の早期教育プログラムを取り入れた、プリスクールとしての機能も併せ持つロングデイケアであり、ニューサウスウェールズ州に32施設、ビクトリア州に5施設を持つオークグループのひ

とつである。

オーク保育園の開園時間は7:00から18:00まで。休園日は土日祝日であり、長期休みには開園している。子どもの定員は85人だが、視察の日に施設内にいた園児はおよそ半数だった。オーストラリアでは、保育料が高額であり園によって料金が異なることや、パートでの復帰が多く休暇を取得しやすい環境などもあって、同じ保育園に毎日1日中子どもを預けることは少ないようである。

スタッフは園長以下フルタイム保育士15人（女性14人 男性1人）、パート保育士3人、シェフ1人の合計20人体制である。



オーク保育園外観

オーク保育園では朝食から始まり、午前中にティータイムが1回、昼食、午後にティータイムが2回と、一日に合計5回の食事が提供される。そのうち3回は、園内のキッチンで専属シェフが手作りした料理が出される。もちろんアレルギー対応も万全だ。また園にはヘルスケアチームがあり、子どもたちの視力、聴力、言葉の発達等について随時チェックを行っている。

園には外国籍の子どもも多く、また障害のある子どもへの受け入れも行っている。多世代交流するGrand Parents dayが実施されている。

保育記録は日誌、3ヶ月ごとの写真入りレポート、セキュリティのかかった保護者専用アプリを使用した1週間ごとのニュースレターを発行している。保護者と密接なコミュニケーションを図るため、この他に定期的なお茶会やお祝い会、美術展、バーベキュー等のイベント、またワークショップなどが開催されている。



#### 4 オーストラリアの保育 3つの特徴

##### (1) 協調性より、個性を大切にする

日本では、「みんな同じ」が当たり前だが、オーストラリアでは、「みんな違う」が当たり前だった。

オーク保育園は一斉保育ではなく、20人のクラスにおいても個々の発育や興味に合わせてそれぞれ好きなことに取り組む、というスタイルだった。教室にも園庭にも遊びや学びのコーナーが数多く設置され、子どもたちが自分で遊びを選んでいた。食事もピクニックしながら園庭で取る子もいれば、屋内で手巻き寿司を楽しむ子もいた。子どもの感性を引き出すことを重視していて、毎日のカリキュラムに音楽やアート活動を組み入れている。我々が訪問した日も、園庭にキャンバスと絵具のコーナーがあり、興味をもった子どもたちがフィンガーアートを楽しんでいた。

個々の成育状況を第一に考慮するという観点から、小学校に上がる基準をクリアできる年齢も一様ではなく、基準を満たしていない子どもについては更に一年もしくはそれ以上プリスクールやデイケアで過ごす場合がある。就学年齢になったら

一斉に小学校に入学する日本の教育との決定的な違いである。

##### (2) 保育の質を担保する仕組みがしっかりしている

NSW州ではDepartment of Educational and Communitiesが管轄し、共通した教育理念やガイドラインに沿って教育的指導を行っている。連邦政府はNFQ (National Quality Framework 全豪レベルの質の枠組み) に基づく厳しい第三者評価を実施しており、保育施設は2年に1回のレポートの提出が義務づけられる。また1年に1回ACECQA (Australian Children's Education and Care Quality Authority) による監査があり、2~3日かけて保育状況を厳しく観察される。

##### (3) 手厚い保育士の配置

0~2歳は子ども4人に対して保育士1人、2~3歳は5人に対して1人、3~5歳は、10人に対して1人と、日本より手厚い保育士配置であり、保育士が慌てることなくゆったりと仕事をしている姿がとても印象的だった。





①園庭でもアートや創作活動をしていた ② 2～3歳児のランチ。ピュッフェ形式で、食べる量は自分で決める ③紫外線が強いオーストラリア、大きなサンシェードの下で遊べる園庭 ④⑤日本から持参した折り紙で、即席の創作プログラムを実施。みんな喜んでくれた ⑥園の説明と案内をしてくれたAshleeさんと清山リーダー、子育て支援班のメンバー

## 5 研修を終えて

オーストラリアの働く女性に対する支援を端的にまとめると、「出産・育児と仕事を両立できるフレキシブルな労働政策と、多様な保育政策のハイブリッド型」と言える。

子育て中は働く日数を減らし、週2～3日子どもを保育園に預け、子育てがひと段落したら元のポジションで「フルタイムジョブ」に戻る。また、雇用の流動性が高いことから、キャリアアップをめざしてよりよい条件のところへの転職も可能である。このような柔軟な労働環境が子育て世代を支えているのだと思う。

一方で、次のようにも考えられる。オーストラリアは物価が高く、安定した生活や充実した教育のために夫婦ともに働かなければ厳しいという経済的事情があるにも関わらず、「保育料が高額ゆえに、毎日ではなく週2日～3日しか利用できない」という話は、言い換えれば、「保育政策が充実していないから、パートタイムジョブ制度がこれだけ発達している」のではないかということである。

保育料に関しては、所得に応じた補助制度により、平均的な世帯では実質の負担額は日本とほぼ同等というデータもあるが、「保育料が高い」という声は、現地訪問時によく聞かれた。その点に関しては、日本は待機児童の問題はありながらも、日本の方が利用しやすいのではないかと思う。

オーストラリアの保育システムの中で参考にできることは、子育て期に男女（父親、母親）ともに利用できる柔軟な労働政策ではないかと思う。また、保育の内容から見習うべき点は、個性を大切にすること、そして多様性（多国籍、多民族）に対する受容と寛容さである。

また、公的機関が保育施設に対し厳しいチェックを行うことは、政府が乳幼児期の健康や教育を重要視していることの表れである。両親に代わり保育をする時間の長い保育施設に対する定期的なチェック体制を確立することは、子どもの心身の健康を見守るという点において理に適うものといえる。このようなシステムは、今後日本においても積極的に推し進められるべきではないかと感じた。